

昭和十九年十二月七日發生

東南海地震体験談集

昭和五十九年十二月

尾鷲市総務課収録

一、尾鷲市林町 大倉周治（当時40才）

地震の時は自宅におりました。昼食をすませて外に立っておった。そしたら地震がよってきた。昔は各戸で用水桶をおいてあった。それに入っていた水が振動によりザザーツと零れるくらいの激しいものであった。

私は地震の予感がしたので、知子町へ行っていた子供たちに津波が来るかわからんよって準備しておけといつて家に帰った。そしたら地震から17分〜18分で津波がやってきた。昔は地震のあと津波の来るまでの時間は、ご飯を炊くひまがあると聞いておったが、あのときは早かった。

新町の方から津波が来るとおめいてきたので、家内と姉の子に裏の畑に逃げれといって、食料と身のまわりのものを持たした。私は警防団第四分団の分団長をしておったので、家にはおれないのでそのまま本部（当時役場）へ走ったのです。それから町内を巡回せよと言うことで回った。

何回目の津波かわからないが、長谷川さん宅と吉田氏宅と一メートルちよつとの空地があつたが、そこから潮が吹いてきた。仲とき急さんがとなりにおったが、街を逃げたら危険やで本家を通って中村山へ逃げよと指示したことをおぼえている。

林町は今の小島たばこ屋あたりまで来たと思う。林町十番一号あたりは海水でいっぱい、缶詰工場（現在中山冷蔵第二工場）があつたがその麦やしょうゆのたるが、この家の裏まで流れてきていた。

私の裏座敷ではタンスの引出しの一段位まで海水が来た。この家は道にのつた程度であり、私の家の内庭では五寸ぐらい水が入った。

新町は低い関係で今の山崎屋さんの前に一丈ぐらいの高さにごみが道につまっておって、私はそれをのりこえて浜へ出ていったおぼえがある。

念佛寺のところを通ったら、念佛寺の北門のところ小さいてんま船が浮いておった。丸三のところ細い道で、そこらにもドラム缶がごろごろしておった。後から調べたんですが、船が大小合せて五十三隻上った。

高町は奥保の倉庫になっているとこの、内山という人の所まで舟があがつていた。尾鷲製氷（現在石川商工、港町四番八号）に南丸（早田の舟）が米を積んだままのしあげていたので、その警戒に夜警団がでた。米を盗みにくるので、缶詰工場の冷蔵庫も相当にいたんだ。警防団が出て町々の角に立って夜警をした。津波のあとかたづけも警防団が出てやった。

一番困ったのは食料で、警防団の団員にご飯を食べささんなので、役場からはあまり出ないし、手弁当みたいになかつこうで出た。

くらがりやは新川原町におつて、あの当時缶詰を仕入れていたんでしようか、それが流されて北浦の橋の下に缶詰がようけ積んでおった。それをあっちの分団の人が拾いに行ったと聞いている。畦地増三さんは昔町会議員をしたことのあるひとで、浜のほうに住んでおったが、波に流されて屋根に乗って北浦の橋のところまできた。あの時の死者は川原町、新川原町でだいぶ出たと思う。警防団の自動車で今の電源の方へ焼きに行った。

一度死体をおさめて、寺から焼きに運んだ覚えがある。家を出てから警防団の仕事で一ヶ月ぐらい帰らなかつた。物を盗りにくるのが多いので、町々の入り口に警防団を配置して夜警に当たつた。今同じような津波がきたら、相当海水につかるんじゃないかと思う。地盤が沈下したように思う。

国市に石地蔵があつて入口に神様があり、それをずうといくと本家の製材工場があつた。その工場は満潮の時でも通れたが、地震のあとは潮でびしゃびしゃになっていた。

二、尾鷲市朝日町九番二十号 吉沢一男（当時32才）

引本造船所に勤めていた。地震のおこったときは、船と船の間におつた。船がゆするので危険に思い浜へ逃げた。浜で立つておつたら砂浜へ足がめりこんでいくように思つて、板の上に立つておつた。

引本を見たら土煙が立ち昇つて、家が倒れていくのが見えた。その前に須賀利に爆弾が落ちたので、また何処かへ爆弾が落ちたのかいなと思つた。

事務所のほうから道具を片付けて家に帰りなさいという命令があつたので、家に帰るために長浜の市場のところに来たら、津波が来たぞとおめいてきたので私らは津波がどこまでくるんやらわからんし、初体験じゃもんで長浜の家の間を通つて山の上上がった。

そして見いよつたら潮が段になつてずうつと来るんさね、あれが津波かいなと思つた。岸にないである船が丸太を積んでいたが、波がくるともち上がつて石堤防の上ののつて、潮が引いたら船が倒れて、丸太が海の中に落ちた。

それが何回か水がいたりきたりしている間に、おさまつたもんで家に帰ろうかということ、引本の町は通れんよつて山を越えて小浦へおりて、渡利の船を走つて渡つて旧道を通つてきたが、大きな石がよおけ道へまくれておつた。

そこを通つて尾鷲まで約一時間できた。その途中伊勢新聞の派遣で坂田さんに桜茶屋のあたりであつたので何処まで行くのかと聞いたたら本社まで歩いて連絡に行くといつていた。

北浦の橋のところに来たら、道の上に魚がいっぱいピチピチやつていた。皆恐ろしいので拾う人もいかなかった。家に到着したが誰もいないし道端にごみがいっぱいあるし、サツマイモがごろごろしているがひろい手もない。家族の逃げたところが見当がついたので、そこへ行つてね、そこで一週間ぐらいとめてもらった。

他人の話では一番最初津波の来るときは、堤防の内側の底が見えたそうです。うちのおばあちゃんの話では、私達子供時から津波は地震がよつてからご飯をたいて食べてそれを弁当にもつて逃げられるだけ時があつたと言つておりましたが、15分〜16分で津波が来たように思つた。

おばあさんはこんな地震におうたことはないと言ふし、防火用水はたてこんぼうつてとるし、隣のおばちゃんとモンペはくやら騒動しよつたら、瀬木山に見張所があつてあそこからおめきこんみよるもんで、何やろと思つてこつちへきたら、津波じゃいふんで浜の方を見たら山口さんの下の方にうどん屋があつて、そこに大きな波が来てその家がフワーッと倒れていくんで、恐ろしきつてつて姉はおひつもつて逃げるし、おばあさんは米をもつてきたらお父さんはおらんし、本家の中庭を通つておひつと米をもつて中村山へ逃げて皆なワーワー泣きよるし、津波のあと家に帰つてみたら海岸の方は家も船もグチャグチャである時は、船で家が倒された。

私の家の勝手口から海が見えた。店は水につからなかつたので警防団が来て浜の人におにぎりを配つた。

三、尾鷲市朝日町 山口みよ多(当時40歳)

私は十月に四人目の子供を出産したばかりで、昼ごはんを食べて前の北村さんとこが常会長をしておったので、そこでタバコをわけていたとき地震がよってきた。

北村さん家の前のおじいちゃんやんが居て、そのおじいさんは地震じゃじょうと言うて外へもよんでやんし、子供を抱いて入り口のガラス戸を持っておるし、地震がやんだので家に帰ったら棚のものはみな落ちていりし、洗濯物も落ちていりし、それを拾っていたら、おとうさんが帰ってきて、地震がよったら津波がくるかわからんでと言うので、津波らきやへんわいていいよった。

長男は幼稚園で、妹は三才、長女は八才、それに生まれたばかりの子、その時は瀬木山に敵機が来た時知らせる半鐘があつて、何かあると鳴らしておった。

その時もカンカンと鳴らすので敵機が来たんやないかと言っておつたら、外は浜から逃げる人いっぱいになってきたので、どしたんだなっていつたら津波やつて言うんさ、隣の人は米を持って逃げるし、わたしらめしをもつので手いっぱい米どころでない、子供はおらんで捜さんなんし、そらの方へ早よいつかいつて石やさんの方へ逃げた。

姉の子は配給のタバコをもたして新川原のじいちゃんへいかしたが、新川原町の人々は津波は来るっていつてだれもおらんと行って帰ってきた。それで長男と二女は小学校へ行っていると言うので石垣へ行ったら、石垣にはだれもいなかった。学校へ逃げたら今度は中村山へ逃げなあかんと言うので行ったら、ようけおつて今どこどこは流れた、新町は流れたと聞くがよう見やなんだ。新町の下に幸運丸があつてそこまで波が来ていたが、それから下は皆流れた。

しとかあ中村山におつたが、学校の運動場へ行けと言うので学校へ行ったら、運動場はいっぱいどこどここの人は死んだ、どこどここの人は死んだと言うて、これはえらいこっちゃ、夕飯はどないなるんやろ言っていたら、にぎり飯をくれるんやっわいとと言うので学校に皆おつた。

津波もとまったと言うので家を行つたが、警防団の人が見張っていて入らしてくれへんし、道はダンヅカになっていりし、梯子のようなものをつかつてそれを越えて家は流されていなかった、屋根から下りて衣類をもたなあかんと言うので衣類を持ちに行つた。幸い潮はダンスで分かつたが下から一メートルぐらいの高さまで来ていた。

その前に子供を捜すのに騒動した。子供たちは上へ逃げたというので、どこまで逃げたんやろと聞いたら、旧女学校の方の竹藪へ逃げたとのことであるが、北村道生さんと子供らは新町の方に帰つて来ていたが、途中高町の人達に会つて今家に帰ったら危ないと言うことで、その人達といっしょに段々畑まで逃げたそうで、しばらくして子供達はほんじ(石垣)へ帰ってきた。

新町では、長屋のおばさんが一人死んでいるが、その人は米を持って逃げるのに逃げ遅れたんやろな。裏の人でおじいさんとおばあさんがいたが、米袋を背負つたまま死んでおつた。新町方面は船は入つてこなんだけど、いろんなごみやドラム缶、丸太などがようけ町の中に入ってきた。

四、尾鷲市行野浦 東 新一（当時32才）

尾鷲漁協経営の大敷網へ行っておって、昼めしをくって国市が白砂青松というか美しいところで、尾鷲造船があつてそこで定置網の船を造つておつたが、完成したのでそれを下ろすのに潮時もあり、私ら若かつたので船の下にもぐつて下ろすよう支度をしいよつたら、グラグラとやってきた。長い時間やった。だんだんえろなつて立つておれんのやな、特に砂浜はえらかつたのか立つておれなんだ。しゃがんで座つて皆顔色はないし恐ろしかった。

地震がやんでから岡さんという人が津波のことを知つておつて、これやつたら津波がくるかわからんで準備せよと言われたが、津波やつてそんな馬鹿なことはあるかれといつて皆でワイワイいながらそこにあつた舟を下ろすようにしていたが、岡さんはどうもさわいできたで、津波やで逃げなあかんでと言うから、ハッと沖を見たら尾鷲湾全体が温泉のように真黄色になつて、向井の下、大曾根の下がどろどろになつて押しよせてきた。

サア津波つていうのはこれやぞと言うんで、そんなり造船場のところから倉庫（水試の裏）へ、横に逃げたらあかんど、津波のときはかならず津波をうしろにおいて逃げなあかん、津波は一度にきて一度に引くもんではない、じわじわきて、それを横切つては足をとられ命を落とす。背にして逃げたら絶対にすぐかぶつてくるもんでないと聞かされて、これは津波やということでもどこでもない。船も何もほつとけということでも逃げた。

国市に土井本店の製材所があつたが、そこで働いている人も津波のこと知らんのやろな、それで私ら津波やぞ津波やぞ逃げよといひもて津波というものがわからんなりに恐ろしいものやということでも逃げた。水試のところへ行くのに、中川の土提ぞいに矢浜街道まで行つて、それから林に入り瀬木山の北側の道まで行つたときには、すでに水が倉庫まできていたので、危険を感じたので瀬木山へ避難した。

瀬木山で津波の状況をみておつたが、波が押し寄せてくる、引いていく、一旦押し寄せた波は、船も家なにもかも浮かしてゴチャゴチャにしておいて沖へ引いていく。

その大きな波は六く七回あつたように思う。三回目ぐらいの波のとき、みたら北浦の地方事務があつたがそこまで大型船が流されていた。

北川のほとりはほとんどの家は流されて、新川原町、川原町が全滅した。浜通り、魚市場周辺は全滅した。前の堤防は高くないし波は越えた。当時尾鷲には海軍の基地があつて、戦艦が配備されていたが、それが波にゆられて、行つたり来たりしていたが、軍艦でもどうしようもないんやろ、錨をやるが何をしようが止まらんのやな、軍艦の上では兵隊が船が沖へ行つたり高へ行つたりするたびに、船尾へ行つたり前へ行つたりワイワイガヤガヤしておつた。

夕方になつたら尾鷲湾は家の破れたのやら、国市の木場から流れた丸太、船の破れたのやらでいっぱいやった。

五、尾鷲港町（旧新川原町） 浜地 和（当時18才）

地震がよってきたので外へ飛び出したが、屋根から落ちるものがあるから危ないということで、浜へ逃げようというので、広場へ行くのに浜へ逃げた。

浜の所の日吉丸というのがあって、屋根の棟が二つに割れて、子供を生んだばかりの人が親子でいた。三人が助けを求めておめきよつたがな。屋根から土が落ちてくるし、地震がおさまってから下に降りていたが何か知らんけど、家内中流れてしまったがな。

地震がおさまってから家に帰ったが、神棚のものは落ちていて針やら上に乗せてあったものはみな落ちていたので、それを拾っていた。

それで堀をのぞいてみたらチョボチョボと音をたてて波がやってきたので、これは津波やと思いで弟を背中におんでそんなり逃げたんやけど、この道を西へ走って中井の橋を渡るときは、橋の下は水はなにもないのに波が地下から吹いてきて、渦を巻いて赤土になつてもうてきた。それをみたら一ぺんに腰をぬかしてしまって山へ登るのに、どんなにして行つたかわからなんだ。新道へ上らないうで西の方面へ逃げるとよかつたけど、こつちの方が近いと思つたもんでこつちへ逃げたが、橋を渡つたらあかんと言うのはこれを言うんやろなあ。皆近い山へ逃げよとするやり。

昔の津波は、地震から一時間あまりあいがあるって言っておつたが、二十分もなかつた。ご飯を炊く間ら全々あろかい。逃げるとき二階から外をのぞいていたおばさんに逃げるときには、腰まで水が来ていた。新川原町あたりは中井町通りまで流れて吉ちゃんだけ残った。北浦の方も家全部流れた。

逃げるときは何も持たずに下駄をはいて逃げた。一旦宮の上小学校へ行つて、宮さんの近くにころやすい家があつて、そこにおいてもろうて、一週間ばかりおいてもろうてから今の主婦の店のところにおいてもらつた。食べるものは学校でにぎりめしをくれたのでよかつた。

寺へ泊まつた人もあるし、いろいろやな。このへんだけでもようけ死んだ。この裏の夫婦とか、又、八幡大橋を渡つていて病人をおんで逃げよつて流されたとか、親子で流されたとか、私は親戚の家においてもらつていたが何もなしなので食べるものも遠慮やつた。

六、尾鷲市港町（旧新川原町）

桜木さとる（当時26才）

地震のときは、自宅におったが広いところへということであつたが、津波が来るかわからないので、米をかしよつたら、津波が家へ帰つた。その時は昼食をすませて、いもを買出しに行くのに、準備しておつた。昼の列車に遅れたので、夕食を準備しておつた。

家に帰つたら棚の物は落ちてゐるし、津波が来るかわからないので、米をかしよつたら、津波が来たといふので、そんな子供を三人だかえて、新道へ逃げたんやがな。

昔から地震の後津波が来るまで、ご飯を炊く時間があると聞いておつたが、そんなに時間はなく二十分ぐらいで津波が着たように思う。

新道から浜の方を見たら、八幡神社のところにあつた山本鉄工所の建物が大きく傾いて崩れてゐた。あれだけは忘れられない。

そういうしているうちに、日は暮れてくるし泣いていたら、浜の方の人は皆宮之上小学校へ避難してゐると言うので学校へ行つてしばらくの間おつたが、その後、北浦のおじさんのところで世話になつた。

学校におつた時は炊き出しをしてくれたが、そんなに長くはなかつた。にぎりめし三コとコウコウ三ツもうた。

波の大きいのは三々四回ぐらい。あときは九州の別府温泉へいっとなるように思った。ブクブクと潮が川底よりわいてくる。道路に潮がのつてくる前にブクブクわいてきた。

七、尾鷲市朝日町

若葉 治（当時41歳）

当時須賀利小学校々長でしたが、地震のときは教室におり、昼食に帰ろうと腰を上げたときでした。とつさの行動は、廊下の片隅に寄つた。その後児童を集めて裏山に避難させ、私も一緒に裏山に逃げました。

津波で困つたのは、タタミはだめ、衣類も全部ダメ、食料にも困つた。家族とは避難する途中逢つたので寺に居るよう連絡しておいた。

当時は学校に御眞影が奉写されてあつたので、潮にはつからなかつたが、万一を心配して村役場の階上に奉写、村役場で三、四日過ごしたことが思い出されます。

八、尾鷲市三木里町 上岡 太郎(当時39才)

当時は南輪内外二ヶ村学校組合立黒潮青年学校の職員室にいました。校長は木本町へ校長会のため出張していて当日正午頃帰校、授業日でなかったので教練担当教師と雑談しながら関係校区出張について話し合っていた。

地震のとき特別な行動はとらなかったが、引き続き何回かの余震があったので自宅の妻子の動静が心配で自宅へ帰る。津波のけはいありとの声と校長の指示に従い重要書類をまとめ校舎に近い自宅に移動さす。

津波は現在の輪内中学校をこえた中奥の田んぼまでできていた。この地震で特に記憶に残っているのは、引きさがる潮と押しよせる潮の打ち合う地点は、どろ色のナイヤガラの滝そのものに感じられた。曾根・賀田の如き地形のところは、強震の場合海の色に気をつけるべきだなと感じました。

四十年近い昔の記憶をといわれても細かいことはもう忘れましたが、逃げ遅れた老父を助けようとした方をみんなで引きとめられたこと。国防婦人の会合に出席された東禅寺の奥さんが津波襲来で帰途につかれたが、その途中大又宮林の製材所までこられた時、津波がおしよせてきて、その時男の方があわてふためいているのを勇気づけて折柄引き潮で流れてきた丸太にすがりついて曾根の宮様の前で救助されました。賀田は海岸すじで残ったのは大勝館唯一軒でした。死者は二十三人でした。

私は小学校の主席訓導の喜多勉氏と話しあって、救助本部も設置されないの、私宅に小学校のテント二張を設営しましたが、それがそのまま救助本部となり緊急に復旧したただ一つの電話が私の宅に設置され、空襲警報の出される毎日、昼夜をわかつたず警防団長に報告しました。

こんな大きな被害に遭遇した場合、如何に立派な組織がつくられても真価を発揮するのはむしろかしいと思います。配給米が現在の中学校付近まで流れているのを小・青両校の生徒児童で回収しました。主として高等小学校の児童でしたが、米を講堂で乾燥させました。三日目ごろのなると米こうじができかかっていました。

九、尾鷲市中央町 村田 勝二(当時38才)

当日は向井小学校に勤務、校庭で手旗信号指導中地震がぐらぐらときたので、生徒を校庭中央に集結し、全校内巡視して各児童の家庭へ班地区別に引率して帰す。

向井地区は湾の側面であり海が盛り上がるだけであった。津波の避難をする必要はなかった。津波の後非常に困ったのは、市街地との交通が困難であったことで、ガンガラキを回って徒歩連絡をした。当時のことで記憶に残っていることは、

一、 海の移動で単に波ではなく、引いていく時の速度と力のものすごさ、長いうなりのような地震であった。国市の松が梢だけ出ていた。一

二、 地震の前兆など何も記憶はありません。

三、 地震はうなりのようなひびきを伴ったと思う。そんな長い地震の時、大抵津波がくると言っていたのだが如実にはつきりしました。地震の後、津波がくるまで相当余裕がありました。前の浜と国市の浜が、ものすごい海水の襲来で水没し押しこまれ引いていくとき家も物も急激にさらわれた。

津波の状況はまともに見えたので、初体験でもよく判りました。防潮堤など湾の前面のものは一たまりもないだろうと思いましたが側面のもは防禦力があると思えました。

十、尾鷲市朝日町15ノ6 南崎 東海士(当時37才)

地震当日は、風邪引きで自宅で寝ていました、突然家がゆれだしたので外へ飛び出した。

津波を予想したので服に着かえました。間もなく高町の方から、「津波だ」と大声をたてて多数の町民が走ってきたので一緒に尾鷲小学校へまず避難しました。

津波は土井周平氏宅北側の溝あたりまできたかと思えます。地震津波のあと非常に困ったのは、津波の避難中現在の港町あたりが大火災だというデマが飛んで恐怖心を感じた。

家族とは妻は学校勤務、母は家にいたので避難を促し、尾鷲小学校校庭まで逃げた後、夕方近く家に帰りましたが皆無事でした。

特に記憶に残っているのは地震の起こった直後、近所の主婦連中が町中に集まって雑談をしていたので「津波が来る」と警告したが、全然耳を傾けなかったが、そのうち青くなって避難した。

昭和十九年十二月の大地震、津波は戦時中の災害であつたにもかかわらず、いざという時の事前準備をたとえば非常袋の用意等が出来ていなかった。ただ体一つで逃げただけだったが、幸い私達の区域には被害が無かつたので事なきを得たが、平常の心がまえ、いわゆる「常に備えよ」ということが大事だと思えました。非常時にはつきもののデマが広がって、当時の町民に相当の不安と恐怖心を与えたことは事実である。

当時は情報施設の活動も不備だったので止むを得なかつたと思うが、今後もし災害が起こったときは的確なる情報を流して、市民に不安と動揺を与えないよう希望します。

現在は地震と津波の関係は周知されているようであるが、当時は案外無知だったように感ぜられる。地震と津波の関係がもっと徹底しておれば、さらに人命も救えたのではないかと思ひ、当時の惨害を残念に思います。当時は車がなかつたので避難するにはかえって都合がよかつたと思います。が、今後あのような事態が起こったとしたら、車の通行は被害に一層の拍車をかけるのではないかと大いに気になります。

十一、尾鷲市倉の谷 森田 賢輔(当時50才)

昭和十九年十二月七日午後一時半、午後の授業が始まると間もなく、突然グラグラ学校がゆれた。地震だ。相当強く、そして長かった。私は来客中だったが、ガラス戸を開けて先に飛び出し、つづいてお客様にとび出して貰った。

私はすぐ運動場の真中へとび出て叫んだ。当時は戦時下で、避難訓練が時々行われたから、避難といってもめづらしいことではなかった。私は、運動場から「出よ」「早くでよ」と大きな声で呼んだが、なかなか誰も出て来ない。校舎はおもちゃのようにグラグラ揺れている。ほんとうに漫画のようであった。

しばらくすると、子供が西から東からどやどや走って来た。出かけたら、案外早く運動場の中央に集まった。ここで私には我にかえり胸を撫でた。

子供達は、脚がすくんで階段を下れないので困ったと、口々に叫んでいた。すぐ点呼をとらせて先生に児童数を確認してもらい、異常なしとわかって、みんなようやく安堵した。

そして次のあるまで、その場に休憩さして、職員との打ち合わせをした。先ず教頭の西尾竹雄先生に御眞影を預け、二、三人の若い先生がついて新道の上の安全地へ避難してもらおうことにし、他の大勢の子供達は予て練習してある通り、父兄に手渡しで渡すことにして、確実に教師の手から渡すことにした。

そのうち、町の人達が、新道を宮の森の方から地震だ、地震だと新道を上がって行くのが見えた。子供たちを家の人々に渡して、静かになったので、御眞影の奉還することにし、新道の西尾先生を迎えに出かけた。

新道の上で御眞影を受け取るとき、遙かに築港内がよく見えたが構内は材木がいっぱい流れて、歩いていけそうに見えた。

冬の日には短く、何度か余震がつづいたが、どこからともなく学校へ避難してくるようになり、皆が寄り合い夕方囲まい合って校内は避難の方々がいっぱいになってしまった。

その夜も何度か余震があり、その都度、みなびくびくして校内で夜を明かしたのです。

それにしても給食室の大きな鍵を保管している仲先生(脇の浜居住)が風邪で休んでいる時であったが、八幡山、北浦、宮の後と被害地を越えて持って来てくれたときは、大変有難かった。翌朝、職員、小使いさんと相談して、避難の方々に給食用の味噌汁を接待することにした。小使室の前でお椀で立ち飲みもしてもらったが、寒い朝の思わぬ御馳走にみんな立喰みの姿は今も忘れ得ぬ景色である。尚この味噌汁について記して置くことにしよう。

一、味噌 役場給食係 故 入江遼平氏

二、魚 天満浦 高濱新次郎氏

三、味噌汁材料 冷蔵庫経営 故 二郷重雄氏

四、燃料薪木 北浦町 故 山城愛之助

これ等はみんな、無料で提供されたものであります。

時は、丁度戦時下で今振り返って見てもみんなすぐ体制がとれる位に思える。

全学年に不意打ちに行う避難訓練、各大、中、小隊旗に鼓笛隊のついた大日本青少年団訓練、通学団宮之上父兄会と組織が充分に出来ていて今も誇らしい。

学区は北浦、上川原町、堀町、野地新町、坂場で、夕方、私は私宅前の川一杯まで塩水が来てようやく助かったと連絡があったので、宮前の橋まで視察し、はるかに北浦橋の様子を見て学校に帰った。翌日北浦や天満地区を見てその悲惨に（一字抜け）き入った次第である。

学校はその後一週間位は避難所に使われたが、二家族だけは一ヶ月も一教室に住んでいた。

十二、尾鷲市天満浦 村山 察道

当時は尾鷲小学校教員で地震のときは、学校で会議中でした。ガタガタときたので窓をあけて外に出ましたが、すぐ中村山に避難しました。家族とは、学校の近くに家があったのですぐ連絡が取れた。

そのころ食料営団の米をつんだトラックが海へ落ちた為、その浸水の米をもらって連合町内会で炊き出しをして避難民に与えた。

津波は、地震後十五分すぎた頃発生した。尾鷲神社前の橋の上に大型船が乗り上げていた程であり新町、高町、川原町、新川原町等はみんな流され、死者も多かった。

夜に入ってB29の空襲があるとの公報があり、尾鷲の人々は皆尾鷲トンネルや北山道路等へ避難した。十二月八日避難民は尾鷲小学校の雨天体操場で寝食することとなった。

私はその当時は、尾鷲連合町内会の会長として婦人会等を指揮し、炊き出し等をして避難民を救ったが、短いものでは一週間、長いものは二ヶ月尾鷲小学校の雨天体操場で生活していた。

十三、尾鷲市九鬼町 稲葉 圓治（当時36才）

地震の当日は、尾鷲小学校（上校舎）において授業中でした。グラグラと来たので生徒を机の下にもぐらして、地震がやむのをまつた。そのあと地震の状況について話し合いをして。その後上の運動場に集合後、中村山へ避難した。

地震前の気象状況に例えば無風でどんより曇っていたとか、又些細なことでこんな変わったことに気づいたとかの記憶はありませんが、地震振動中職員室から教室まで速足でコンクリートの渡り廊下を走ったが足が地につかず走れなかったことから、揺れ止むまで一時身をひそめ揺れ止んでから避難すべきだと思った。古老の話では、地震後、津波が襲来するまでにご飯を炊く位の暇があると聞いていたが、それが十五分と経たないうち（児童にそんな話をしていた）に町民が津波だと避

難し始めたのには啞然とした。

学校にいたので、地震、津波等の前兆は何一つ気付かなかつたが、後日井戸水が引いたとか、海面に異常を認めたとか聞かされました。津波の恐ろしさと強力な破壊力を始めて経験したその後、チリ、アリニューシヤン津波も体験しましたが、その引き潮の強いには驚きました。

津波は旧大鷲館前あたりまでできていたようにおもいます。稲束を燃やして津波の来襲を村民に知らせた故事を思い出して震源地によって以外に早く津波が来ることを知った。

十四、尾鷲市坂場町 七見 義一（当時33才）

空襲がだんだん激しくなつて来ましたので、当時私は四日市に居ましたが、仕事を止めて尾鷲へ帰つて二、三日した時だつたと思います。地震のときは野地新町の家におりましたが、そのとき何をしていたか記憶にありません。

地震が激しくなり、ビン類が棚から落ちるので、広い場所へ避難することにして裏の川原へ逃げました、津波が来るということ、尾鷲駅の西方の山へ逃げましたが、津波は北川へ着ておりました。津波の後家族全員帰つてきて無事を確認しました。

地震の当夜は余震が次々と起こりましたので、服をきたまますぐ飛び出せるようにして休みました。

翌日から町内会の手伝いとして海岸地区へ約一ヶ月程出て後片付けをやりました。北浦の現在の橋のある所から海岸まで、まるで堤防のように家の残がいが重なり合つてひどいものでした。

十五、津市西阿漕町若田七の九 井戸 妙子（当時17才）

地震のときは職場で仕事をしており、二階におつたのでゆれがひどいので、柱にもたれて静まるのを待った。落ちてきた物を片付けたりしていたが、津波が来ると聞いて逃げたが、逃げるのが遅かつたのもうすこしで死ぬところだった。

実家は旧川原町の中央位で全部流失しました。職場と実家とは割合近い方でしたが、連絡もせず避難場所の尾鷲駅で始めて母に会い、お互いに無事をよるこんだ。

子供の頃、母から昔話の一つとして地震の後には津波が来るが、ご飯を炊くひまがあるからそのうち逃げればいいと聞いていました。それぐらいの事は誰でも知っていたと思います。にもかかわらず何十人もの人が逃げ遅れて死に、私の友人も何人か死にました。生まれて始めて体験する大きな地震なのに、その時私は津波がくることなど少しも考えませんでした。その時一緒に居た大人たちも同じ考えで楽観的でした。

ところが何だか外がさわがしく、津波が来るから逃げた方がいいと言うことで、二階からおりて

玄関まで出たら、もう水がどんどん入ってきて腰までつかり、外の溝へ足をつっこみ倒れそうになりました。その時水際で大きな声で逃げろと住民に声をかけている海軍さんが、私を見て水の中に入ってきて、私をひっぱり上げてくれました。水から出た時、腰が抜けるとはこのことでしょうか、膝がガクガクすわりこんでしまいそうでした。

気を取り直し必死で走り続けました。尾鷲小学校の前まで行っても、まだ水がきているようので、後を振り向く事が出来ませんでした。知人から母が尾鷲駅にしていると聞き、行ったら風呂敷包みなどかかえて、おびえきった顔で震えている人がたくさんいて、やっと母に会うことが出来て無事を喜びました。

母から「もう家は全部流れてしまったよ」と聞いたとき、始めて涙がどつと溢れてきました。家を失った人達はその夜尾鷲小学校に寝ました。夕食に玄米のおにぎり二コと新香二片いただいた味が忘れられません。

今グラツときたらすぐ火元へ飛びます。次に出口をあける。そしてあわてず状態をみて行動します。テレビ、ラジオの情報をしっかりと聞いて判断して逃げ遅れないことです。

最後に小学校にいる私共の家族を引き取ってくれた知人の親切が忘れられない一つです。これだけの親切を今私に出来るだろうか。幸せな現在、何か一つでも社会の為にお返ししたいと務めて居ります。

十六、尾鷲市賀田町 柴田 まち

当時私は名古屋にいたのですが、母から聞かされたところによると、今の保育所の上に私のところの田んぼがあったのですが、そこで母が仕事をしていたら地震がよってきたので、これは大きいわと言っているので跳んで家に帰ってきました。

井戸のポンプを押したらスカスカと言って水が上がってこないのです、これはえらい、あかんと言うので父が足が悪かったので、父を逃がさなあかんと行って逃げたのでそんなに早くはなかったように思う。

名古屋にいたときは、町内会で各戸に防災水槽が置いてあって毎朝水をいっぱいに入れてあったが、地震の後外に出てみたら道は川のように水浸しになっていていっぱいに入れてあった防災水槽の水はからっぽになっていた。家の近所の寺の灯籠は倒れていてそれはひどいものであった。

地震当日は家にいました。昼食後のことで休憩しておりましたら、ガタガタときたので母がいち早く外にとび出したので、その付添いに外にでました。津波がくるというので、戸締りしてでるのが精いつばいでした。避難は隣近所の高台の家にしましたが、津波は家の天井裏までできていました。わが部落は九鬼湾の西、字名古として十世帯ぐらいの小部落だった。U字型の奥だったので津波の被害は大きかったようだ。その頃は現在の九鬼駅は遠浅だった。遅い昼食をとって帰京の準備にとりかかろうという矢先に地震、母は婚前四日市で幼い頃から地震のこわさを味わっているとかで、とかく地震には敏感だった。ゆれが来た時いち早く外にとび出していった。

大地の揺れる間もじっとしておらず蜜柑畑をあちこちするので、そのそばにぎっちり付添わざるをえなかった。大ゆれが落着いてどれほど時間があつたか定かではないが、山仕事をしていた人が山すそから津波だと大声で叫びながら通つていった。見ると湾の入り口の岬さまのところにしづきがあがつているのがみえた。

急いで家に入り戸をしめてという母の声に兩戸をしめ裏口からまず母を避難させた。京都へのみやげと、もろぶたに入っていた魚のあぶりを手渡すのが精いつばいだつたらうか、みるみる潮がさしてくる。すぐ出ればよかつたのだらうが、一瞬そこから出るのをためらつた。そして反対側から出ようとして硝子戸に手をかけたが、びくとも動かない。潮はどんどん増えてくる。部屋の中で一呼吸、二呼吸、そのとき幸いにも硝子戸が一枚ふわりとあいた。そこから上げ潮にのって泳いだ。自分が来ないので案じてくれた人々の顔、若者がさし出してく棒をもち高台にかけあがつたことだった。

着がえのために上の母屋の納屋まで行く。その途中の上の家への連絡橋は、既になく川の石づたいに行つた。着がえおわつて納屋から見た光景、三波、四波ごとに下の家は棟近くまで潮がくる。ひき潮の海は、現駅前の埋立地のもつと先まで干あがつて海底が見える。海ぞいにあつた数戸の建物は、すつかり流失していた。

田海道の一住民が辛うじて屋根ににげられたのであろう。親子三人(子供は二才だつたらうか)しかつとよりそい、湾内を波のまにまに漂い助けを求めていた声はいまなお忘れられない。舟のない部落からは、どうすることもできなかった。やがて町からの救助船に無事助けられた時の安堵、余震の続く第一夜、高台の無事の家で被災者達がまんじりともせず夜をあかした。

その後幾日か、その家と自分の家の母屋とで分宿して共同生活をした。もともとまだ電燈のついていない部落だったので、停電にはさしてふじゆうを感じなかった。一夜あけた夜は澄んでいた。ぬれた畳を干しているとき飛行機雲鮮やかな一機、あれがB29だとはそのとき思いもおよばなかつた。

家、天井は見事に破損、建具も若干流失やら破損。金庫が玄関先一間ぐらいのところ、泥に半分埋まって無事だつたことも印象深い。

食料のことは特に記憶にないが、京都の家内の実家から父が代表して食料やら日用品やらを持って、八鬼山越えで被災見舞いにかけてくれたことは実にありがたいことだった。

十八、尾鷲市北浦町（当時新町） 北村 道生（当時小学五年生）

当時は戦争の末期で食糧事情が一番大変なところで、そのころから学校給食が始まったように思う。それは現在のようなものではなく、せめて子供にはご飯を食べさせようということで一椀一汁であったが、米はなく昼食は、米ぬかをまるめて小判型にして編焼きするのが主食であった。

私は小学校五年生で昼過ぎて、家に帰りつくなり地震がゆれてきた。煙草の陳列棚がいくつも置いてあったが、それが倒れてくるので恐ろしかったが、そこで何とか揺れるのをしのいだ。母は大きな声で悲鳴をあげていた。

弟らは幼稚園へ行っておったので、迎えに高木タバコ店、清水眼科のところを走って行ったら、今の幼稚園のところで二人に会った。それで二人をつれて今の郵便局（旧町病院）のところまできたとき、石恒のおばさんがちとみを家に帰すのと会ったのであずかり三人をつれて家に帰るべく内山病院のところまで来たとき、何人かのお婆さんがつくなくなったのに出会った。

お婆さんらは壁にもたれてハーハーいつているので、僕はびっくりしてどうしたかと聞いたら自分達のことはいわずに、あんたら何処へ行くんと言うので、家にかえると言ったら、今帰ってもあかん、津波がくるで逃げなあかんといわれて、始めて津波を知った。

その時、僕は国語の教材に「稲火の村」と言うのがあって、それを思い出した。それでこれは大変やと言うことで、今度は三人をつれて逃げることになったが、何処へ逃げてよいかわからないので、どんどん上へ逃げた。

今の高校グラウンドの入り口に竹藪があつて、そこまで逃げたら沢山の人が藪の中に座っていた。そこで夕方まで過ごして家族と連絡をとるため下ったが清水眼科のところまで来たとき、警防団の人が立っておって浜の方はそこから入れてくれなくて、尾小の講堂へつれていってくれた。そこは避難した人達でごったかえしており、母を探し出すことが出来なかった。

三人の子供は寝てしまふし、座り込んでいたら母もあつちこつち捜しておったのだと思うが、あんたら何処へ行つとつたんと声をかけられたときは、恐怖にかられ、母にしがみついて泣いた。暗い天井の低い講堂は、足のふみ場もないくらいで、一晚過ごしてあくる日に家に帰った。

新町は米やの前あたりから、ごみがいっぱいではない状況で、二階までも流木がうまっていた。それを越えて二階から家に入ることが出来た。家は流れなかったが、一階部分は30度ぐらい傾いて、裏にあった借家は全部流れた。波は一メートル30センチぐらいのところまで来たが、二階は浸からなかった。

翌日流木をあらけていたら、飛行機が白い線を引いて飛んでいるのを見て敵機がやられて、いま

すぐ落ちると漁夫の人が言っていたのをおぼえている。

その年は尾鷲湾で鰯の大漁があったのか、キンカラ箱の中に鰯のにはしがいっぱいまっていた。岸壁は旧缶詰工場だけが残ったが、あとは市場まで全滅して、それにうなぎはわいて一日に六〇八匹ぐらいつ釣った。水産試験場の前の岸壁は、石積みであったが崩れなかったが、コンクリート造りの岸壁は崩れていた。

当時中学校の月謝は四円五十銭、映画は四十五銭で、大盛座、東宝劇場があったが、大鷲館はなかった。タバコは配給であったが、マッチも一本づつの配当で配った。

経験上から、当時は避難所も決められていなかったこともあって、親との連絡もなかなかとれなかったが、今は避難所も決められているので、その点は心配ないが、各自が常日頃から認識しておくか言うことである。

避難場所を住民に徹底させるには、一斉に訓練をやるというのも一つの方法ではないか、例えば今までの避難訓練は防災の日に浜から逃げてくるものであるが、子供たちはウィークデーの昼間であれば、学校におるので子供と親が確実に連絡のとれる避難場所を定めて避難訓練をくり返し、くり返しやればそのことを認識させることが出来ると思うし、パニック状態をおさえる一方法である。学校としては、地震の際は校庭内へ避難させて、地震がおさまって状況をみてから集団下校、校内解散をさせるが親に渡すことは考えていない。学校で解散することは、このような非常時において、避難場所の決められていない状態では危険ではないかと思う。

十九、尾鷲市港町 笠松 栄(当時14歳)

地震の時はねんざして学校を休んで家にいたが、北川ぞいに菓子店があり、その前に左官屋があった、そこで遊んでいた。

大きな地震やったな。家の中で地震が終わるのを待ってすぐ自宅に帰ってみると、おばあさんが干してあった麦がまかったんやいうて拾いよるし、ちよつと浜へ行つて来ると云うて浜へ行つて見たら、すごかったな、台風の波のようにゴーゴー鳴つてきて、それを見ておったら他の人は津波やなんやいうて騒動してきたんで、そんなり家に帰つて妹をおんで吉ちゃんの方へ逃げた。そしたらすでに北川の橋はつかつてきていた。川は水が増えてきていた。

私のおじいさんらは沖へ出ていて、右里の前あたりで地震にあい前の石堤防に船をつけて話をしている間に堤防はつかつてきたので、そんなり逃げたと言っていた。

私は北川の橋のところから新道をのぼつて寺山の上に出て、そこから津波を見ていたら、波は乳屋の前の田圃へあがり小型の船が避病院の下のところまできておった。

その晩は坂場のおばさんの家で世話になり、その後は知人宅でいろいろ世話になった。

津波の状況は天気の良い時と同じで、波が白くなっておりかぶさつてきた。このへんの人達は家

内中逃げるので、道路がヤーヤーみたいに混雑した。逃げるときは、家族とは別々であったが避難場所と一緒になった。

昔から地震から津波までの間はご飯を炊くまがあると聞いておったがそんな時間はなかったように思う。

当時のことで思い出すのは、シラミがわいたことで、風呂やでうつってくるのか、それはものすごかった。ランニングシャツはシラミの卵でいっぱいやった。

あくる日、流された船を捜しに行つたが、弁財のところのみつけた。キツネ鯉をつんでおったがそのままであった。

二十、尾鷲市賀田町 木下 ふさ子 (当時28才)

私の経験からすると地震から津波までの間は、時間があったように思った。

あの時分常会があつて、まなとかねぎをどれくらい作っているのか聞いてくれんかと言うので調べに行つておったが、その時地震がよつてきて家と家が地震にゆれてひつつくように見えた。

寺のところへ逃げてみよつたらこえをかついで置いてあつたのが、地震でペツチャンペツチャンとあふれて、地震がやんでから高台から下へおりて行って子供をおんで裏へ逃げておつたら大川次郎さんという人が津波やぞとおめいてきた。

二十分ぐらいあつたのではないかと思う。それで寺へ逃げてみていたら引き汐と満汐とがぶつかつて汐が高く上がつてその汐の高さは寺のところまで来るように思った

当日は、古戸の妹の家から米を出さかいに、足袋をこしらえてくれんかなとたのまれたので、自宅の二階でミシンがけをしておった。地震がよつてきたので、下におりなあかんということで階段をかけおりた。子供たちには何か虫が知らせたのか遊びに行つたらあかんと言うて、表にむしろをひいてそこで遊んでいたの、そのまま子供をつれて中村山へ避難した。

家の前のおじさんには先に逃げると言っておいたが、おじさんはあとに残っていて逃げるときには、波は胸まできておつて二階へ上り屋根づたいに逃げたそうです。

津波がくると言う知らせは、浜の方からおめいてきたが、それはまた大きい地震が来ると言う人、津波がくると言う人があつた。

前の家のお婆さんらはサイロ網が缶詰工場のところ、船をつけておつて、網からサンマをはずしていたとき地震がよつてきて、海岸は地割れをしていたので網の上に止まるまで乗つていたと聞いている。

津波の後自宅へ帰つたが、家の中はどうにもならんようになっていた。自宅の前に三軒借家があつたが、それが私の家の小屋根にかぶさつておつた。北町は私のところの前まで流れて、隣の家は残つたが波は入り口の上の敷居まで来ていた。家の中にはリヤカーが入っているし、ドラム缶はいくつも入っていた。逃げるとき、戸を開けて逃げよと言うので表も裏も開けっぱなしで逃げたので、家は流れなんだんやろう。

津波のあと古戸の小倉さんのところへ一週間ばかりおいてもらつて、その後学校の前の姉の家で過ごした。その姉は、この津波で死んだ。私の姉は魚売をしおつて、学校の前にいたので浜へ出てこなくてもよいのに、市場のところ、にいただき納屋があつて、そこへハカリを忘れてきたので、それをとりに行つたのだと思う。ハカリを持ったまま私の家の軒下で死んでいた。

近所の人で死んだ人もあつたが、大きな荷物をおいねて死んでいたが一度逃げて荷物をとりにもどつて、逃げ遅れ死んだように思う。

当時は食べものに困つて、今の工業高校のところへさつまいももらいに行つたが、いもはよい方でつるや葉を食べた。救援物資をもらったが、子供は小さいので学生服のやぶれたものばかりでなんにもならなんだ。

地震から津波までかなり時間があると聞いていたが、流れた人の中には荷物をまとめていた人もあつたんやろうな。

私の家には海軍さんが二階に泊まつていたが、二階のものは津波で流れなかったが、津波ぼあと泥棒が入つて海軍さんのものが盗まれてしまった。

地震は午後一時半頃やったかいな、丁度休んでいて道具の整備をしておったときで、外へとび出した。地震があんまりひどいので下駄をはくひまがなく、足袋はだしで走った。

外に出てみると皆浜に出ていたが、私はなにかなしに感じるところがあつて、家内に地震のあと何がおこるかわからないから、大事なものをリュックサックに入れてあつたので上にあげておけよと言つて、私と弟は海を見に行つたら、丁度波が吹いてきて、堤防の口（当時は天満よりのところが航路として堤防がつながっていなかった）から漁夫という苗場といつてごみのかたまりがすーつと入つて来た。

サア津波やというので私は町中におめいて走った。子供を先に捜してつれて裏山へ逃がした。現在の景井さん宅のところから海をみていたら、一面目の波が引いたときに荷物をとり下におりると言う人もあつたがおろさなかつた。

波が堤防を越すときは、ナイヤガラ瀑布のようであつた。波が引いていくとき、矢の川の方から流れてきた筏に四人のついていたが、流れるのが早かつた。

津波のあと家に帰つたら、ダンスもなにもかもひっくりかえつておつた。波は天井まできていて、一丈五、六尺あつたやろ。

舟を流したので捜しに行つたが、佐波留の中からずーつと南の方へ流れていて、水の入つていない舟は、三木崎沖まで連なつていた。自分の舟を捜すのに他の舟や流木をわけもていったが、自分の舟はないし、三木崎を西に見るところまで行つたが、戦争中のことで、潜航艇に攻撃されたいけないので、早田に入りそして九鬼口に入った。そしたら二隻みつけたがついに私の舟は見つからなかつた。

そのまま帰つてきたら私の舟は築港へつないでくれてあつた。それは矢の川より筏で流れた人達が見つけて私の舟に乗りうつつて新町のところへつけてくれてあつた。

私は地震のとき逃げるときは、足のともをつけるなど皆に言うている。つまさきで跳べ、それやつたら走れる。それは何故かと言うと、足袋の新調を穿いていたので汚すといけないのでつま先で走つたら走れた。

地震のあと津波がくるとは知らなかつた。何十年に一回やで、私のおじいさんの話では、地震から津波までの間はご膳を炊いて食べる間があつたから、おちつけといわれていた。

地盤は強いのか地震で家が倒れる事はなかつた。大きなゆれはなく、小さく揺れた。屋根の上の平木がギツチギツチと鳴つて透間が出来た。体験から地震の際は新しい家であれば大丈夫であるが、古い家は急いで外に出るようにしたらよい。

長浜では死者はなかつたが、天満で三名死亡した。死んだ人は、避難するのにその方向を間違つたようです。それは裏山へ逃げればよいのに海岸に沿うて逃げてやられて、一方、一度逃げておいて物を取りにいつて二度目の波にやられたが、あれは欲を出したんやろうな。物を捜して奥へ

やられた。

又、大鷲館へ映画をみにいっておつて長浜向けて逃げたが、我が家まで到着しないうちに水がきたもんで、北村タバコ店の所に桜の木があつてそれにつかまつて助かった。

一人は海軍の集会所のようところがあつて、その番をしていたが映画館からそこまで走つて歸つたが、大事なものがあるのでそれをもつて出ようとしたが、すでに波に追われているので逃げられず、表の部屋で死んでいた。

二三、尾鷲市天満浦脇浜 松崎 ふみ（旧姓仲当時30才）

当時宮之上小で先生をしておつたが、風邪をひいて休んでいた。

二階で寝ていたがなかなかひどい地震で、二階からおりるのにヨタヨタしいもておりた。父はこんな大きな地震のときはあと津波が恐ろしいので、母に避難するときは御飯を一釜炊いておけといつて海に気を配っていたが、御飯炊くひまなかなかなかった。

海がへんやから逃げるように言つて、父は兄夫妻の子供を見に長浜へ行つたが、汐鼻まで行つたが長浜までは行けなかつたそうです。そんなり小林さんの缶詰会社の間を山へ逃げたそうです。

私達も裏山へ勝手口より逃げて母親と二人で夢中でした。

私は学校を休んでいたのです、津波がおわつたあと一度学校をみに行かなあかんと思ひ学校へ行ききましたが、八幡山から北浦にかけて通行出来ないのです、山の裾の方を通つて行つた。

当時は毎日ではないが給食をやつておつてその係りをしていた。

家は海岸ぞいに位置しておつたので、津波は二階で3尺つかりました。家は流れずに残つたが、一階にあつた家具は流れてしまつた。一晚隣の家で泊まつてあくる晩から家に歸つて生活した。二階の畳は浮き上がつてそのまんま沈んだ形になっているので、それを乾燥して使用した。一階は家具等全部流出したので、テントで柱を囲て風を防いで生活した。

地震のことについて教えられていたのは、身軽にして逃げたらよいと言ふことですが、死んだ人は一度逃げたが、大丈夫やと言ふ事で荷物をとりに行つてやられたと聞いている。

津波のあと物を洗うのに古里の川まで行つて洗つていた、飲水は山水をひいてあつたので、それを飲んでいたように思う。今でしたら断水やなにかで困るのではないかと思う。

二四、尾鷲市港町 岩崎桃枝(当時44才)

昼食をすましてホットしていたとき地震がよってきて、しばらくの間待っておったが長いこと揺れるので、これはあかんと思い外を見たら、用水桶は木の樽でおいてあったが、水が町へ流れ出して何も残っていなかった。

八幡神社の近くに福光製材があつて、あそこへ逃げていた。地震がやむのを待っておつて、やんだから帰つてきいよつたら八幡山の橋は木でつくつてあつたが、真中にひびが入っていた、橋の近くに日吉丸という二階建ての家があつて棟瓦が外れていた。

家に帰ってきて話をしておつたら、地震のあとは津波が来ると言うので、家で逃げる用意をしていたら浜の方から津波や早よにげよと言つてきたのでそんなり一番先に真つすぐに新道へ逃げた。波は底からもこもこと涌いてきてそれを見ていたら、恐ろしくなつて幾夜も寝られなかった。

逃げるとき中井の橋まできたら、端の間まで水が来ていた。逃げ遅れた人は膝まで水につかつたと言つていた。地震がよつてからご飯を炊いて食べてから逃げたらよいと聞いていたが、その時は早かつた。川原町と新川原町の間の人がようけ死んだように思う。

川原町は全部流れて私たちも親類の家に二三日おいてもらつて、その後坂場に中岡病院があつてそれが借家になつていたので、それを借りてバラックが建設(20年4月頃)されるまで住んでいた。当時は食物がなかったので毎日配給をもらいに行つていた。

地震のあと、余震があるので浜の近くの人は毎日逃げていた。

二五、尾鷲市賀田町 榎本 繁弘(当時37才)

父から聞かされていたが、昭和十九年の地震のあつた三四年前から小さい地震がひんばんにあつたので、何かあるかわからないから注意をしておけと言われていた。

家にいたので地震があつたあと浜に出て海水の状況を見ていたら何ら変化はなかった。そして家に帰つて避難をする準備をしていたが、そういうしている間に津波が来るぞと

いう声があったので高台に逃げた、第一波で皆逃げたようであるが第二波が来る前に物を取りにもどつて死んだ人がようけおつた。

当時の波の高さは、賀田駅とか町内の電柱にしるしをつけてある。又波の先端は賀田奥の板が上がりかけのところまで行つた。

地震当日は松阪陸運が元警察の前に事務所をおいてあって、その次長をやっておった。その日は天気がよくて、昼頃やったと思うが木材の輸送で国市の工場で材木の運搬をしておったが、それについていた。

食事のあとやったかいな、その時おこったんです。国市の事務所の建物はダンスをしているように揺れていた。尾鷲の街の方をみたら土煙がどつとあがっておった。地震が終わるなり自動車でいったん事務所まで来て、家を見に来たんです。

家についていたら津波がくるという声が出たので、これは大変ということで、子供が幼稚園を上に入りいたので何も持たずに一番先に逃げた。

私の聞いている昔からの話は、津波は地震がおこってからご飯を炊いて食べてゆっくりしてから来るといふのを聞いておった。

昔の地震は震源地が遠かったので、あいがあつたと思うが今度のはそうではなかった。津波はタンスの引出し二段目ぐらいまで来ておった。津波が来るのを折橋から見ている

ら、海の水が中川を逆流してくるのが見えた。以前は田んぼで、ひくなっていたので全部灌水した。その時写真機をもっておつたらと思つたが戦争中のことで持てなかった。

避難したあと事務所があいていたので、しばらくの間そこに泊まった。

車庫が今の田岡商店の所にあつて自動車三台入っていたが、それは皆立っていた。そのあと舟が入っていた。

電気はつかなくだったのでローソクを使っていた。水は海水が井戸に入っていたので使用できなかった。

子供たちの話では足袋も何もはかずに逃げた。それだけ津波がくるのが早かったと思う。

二七、尾鷲市大字南浦小久兵衛谷 矢浜 令美（当時19才）

当時は尾小助教授をしておつて、昼ごはんを食べて同僚と話をしていたとき突然地震が寄ってきた。先ず地震が揺ってきたら入口を開けると家が傾いて出られなくなると常に言われていたので、先ず職員室の入口をザーっと大急ぎで開けた。

学校は窓ガラスが多いのでその揺れる音がこわかった。そのあと運動場へ出て、逃げるのは根の張っている竹藪へ逃げようと言うことで、他の先生と手をつないで竹藪へ逃げた。

その時学校の前の二階建ての家が崩れてくるようにものすごいいきおいで揺れていて、その家に近づかんようにして道端を通っていった。竹藪に入ったときには、地震もおさまっていて、中村山へ写生に行つとつた五年生の子供たちは中村山が割れてきよつたと言つて帰ってきた。

その後職員室へ入つていたら机の上は赤、青のインキでねつとつてそれを片付けて便所へ行つ

たが、恐ろしきで足がガクガクして座れなかった。

そのようにしている間に下のほう（港の方）から津波やと言ってようけ逃げてくるので、中村山へ登ったら三回目の波がやってくるところで、堤防の下の石が見えるといいよったら沖の方から真赤な赤土をねったような波がワーワーときてアツという間に堤防もみえなくなってしまうって、その時いた警備船は堤防の上のブイをつけたままグルグルまいよって、川原町を舟が反対になって艫を先にして尾鷲神社の方へ上って行くのを見た。山の上でも皆がワーツ家が流れてくという泣き声がすごかったので私もつられて泣いた。

津波も終わって下へ下ってきたら、ゆりなおしと言うのか、それがどんどんくるし新川原町、川原町、知古町が皆やられた。五平屋の裏にあった二階建ての家は一階をやられて、二階がどんと下りておってその屋根の上を通過して行かんなん状態であった。

自宅は小久兵衛谷にあったので町中は通行できないので尾鷲神社の方へ坂場から入って、神社の裏を通過して西山田を通過して墓の下を出て家に帰った。

北浦の天理のところで沢山の人が死んでいるということに気持ちが悪かった。私のところの本家は、昔の製氷会社のとりにあったが、自分の家の船が流れついて、こわれた形になっていたが本家は残ったんやけど下はどろの海でお勝手の戸棚がわかやの隣の土井さんの角へ流れておって拾ってきた。隠居は新川原町の端にあったんで一番先に流れてズーっと押ししていった形やもんで、一番上に乗っていた。

尾鷲小学校でも児童が三〜四人死亡した。

地震から津波までの時間はかなりあったように思う。巡航船も尾鷲湾は津波やと言うので待機していたが、タライの水のように静かであったそうです。

自宅は今の谷口牛乳の上の方にあつたので被害は無かったが、下の方の人が逃げてきたんで自分の家のものを出してお世話をした。

かわいそうやったのは生徒が家と家には生まれ死亡していた。三年生の子供が父の位牌をカバンに入れてお母さんを捜す。お母さんは子供を捜しているうちに家の壁と壁にはさまれていた。

高等科の子もそうやった。その日は午後早引きしていった。帰るのにオーイ・オーイと手を上げるのでどうしたんと言うたら、早引きしていくぞと手をふって、なぜ早引きするんやといったら、用事があるんやっていったった。

丁度昼ごはんを食べていたんで、お父さんがみえんといってお父さんを捜しに行つて、お父さんも子供を捜して二人とも死亡した。津波の後お母さんは子供がおらんと行って学校へ捜しに来たので、手をふって帰って行つたと話しをしたら寺へ行つたんやろうか、中村山やろか、八幡やろかと捜していた。

私は互いに捜し合うことは危険やと思う、やはり逃げるときは別々に逃げて、避難所は決めておけばそうあわてることはないと思う。

今だに地震がよつたらドアを開けよと親から教えられているので、地震がよつたら丈夫な物の下

へ、そこ空間が出来て助かることがある。外へ逃げたときは竹藪へということが頭の中に残っている。

うちの隠居の隣の人なんか地震がよってから海へ見に行けと行ったら海はえらい引いていたんで、えらいこつちやつんで家財道具をまとめて、お婆ちゃんをつれてきいよったら波は腰までつかってきてひよいっと後をみたらお婆ちゃんはいなかったといっていた。

波に流されて死んだ人はたいてい、一回目の津波あと波が引いたので、これを忘れた、あれを忘れたと、取りに戻って死んだように思う。

物は大事やと思うけど命あつての物種というか、物を取りに帰ったりせんほうがよいなあと思う。落着く所を決めておいて互いにそこに逃げるということ、欲を出さないこと、常に口からすっぱく親から言われたその教えが私にはよかつたと思う。

二八、尾鷲市屋矢浜 相賀 徳一 (当時39才)

今の新見世のどころに検目舎というのがあつて、そこで地震の時、事務員が二十八人ぐらい働いていた。

地震がやってきたので、そら地震やと言うので皆外へ出しておいて自分は部屋の中にいたら、部屋の壁がザーツと落ちて来たのでこれはいかんと言うので私も外へ飛び出した。事務所の前は十字路になつていたので、皆そこにかたまつておつた。

地震がえらいので事務員を皆家に帰らしてから、自分の家も見ておかないといかんと思ひ自転車で帰つて再度事務所に戻ろうとしたが津波がやってきて行けなかつた。

津波で矢ノ川の水が矢浜のところであつちやいして丸しめの足場丸太が矢浜の入口にうちやがつたんで、道路はピシヤと止められた。

十分ぐらいか、しばらくしてから山本朝吉さんに会つたら、おれえのばばが流されたと言うので、わしや消防団やつたもんで、団員を呼ばなあなので半鐘へのぼりよつたら、流されたと言うばあやんはトコトコやつて来た。なんどれ、ばあやん、お前は流れておらんていうので、おれは半鐘を打ちに上がったんやがいていうようなことさ。

しつかりした九十才ぐらいの人でした。安政の津波は、自分の生家でとまっていたと聞いているのでこそでじつとおつたといひよつた。

津波は今の公民館の前で、矢の川と中川の波が打ち合ひした。公民館敷地までつかつた。公民館前の橋は汐受橋というが、わしら子供の自分は秋の大潮のとき大水が出るとうぐいがのぼつてきて釣つたことがある。

タバコ屋からお寺にかけて名古屋というて名古屋は湾のいきづまつたところを言うので、そこまで汐が来ておつたんやろ。港町の山西のおやじが夫妻で流されたと言うんで、それはほつとけんと言うん

で捜しに行った。北浦にあった地方事務所のところは行けいで山の方を廻って行った。津波は矢の川では樋ノ口まで入っている。

今度目あれだけの津波がきたらガンガラキのずっと奥まで行くで。国市でベカに角材を積んでいた人は流されて沖の方に行ったり、ガンガラキの方まで行ったのを見た。

波は二回目は一番大きいように思った。半鐘の上から見いよったら、しゃもをだいて飛んできたのがあった。牛を追ってくるのがいた。今のニュー三紀のところは牛でいっぱいになった。牛をそそうすると七代先までたたるというのでだいじにしたもんです。

大地震の後は余震が恐ろしかった。夜は大曾根の上から向井の上の峠が火の帯になるんさ、桧と桧との葉が地震の時にこすりあって火が出るんやと聞いた。それが火の木と言う。

食料はなくて困った。昭和十六年頃よりだんだんえろなってきた。会社へ行くのに弁当はみなサツマイモやった。

米を持っているのはおれだけやった。町では津波は花屋のところまで、新見世の前はドラム缶でいっぱいやった。矢浜の下地の墓は津波は来なかった。

二九、尾鷲市賀田町 上広 好祐 (当時36才)

当日は前夜から朝にかけて雨が降っていて寒かったように思う。天候はあまりよくはなかったが高曇りで地震の前兆と思われる事件は起こらなかったように思う。

私は地震の時三木里と古江の中間の所において地震が起こるなり賀田へ向かって走った。

古江へきたときは第一波が終わって第二波がくるところであったが、家などが廃れておりその間をぬって走ったが、途中海を見たがひき潮とおし潮が賀田湾の所で波がぶつかって、波が大きくなりちあがつてそれは滝のようになっていた。曾根に行っておった人は賀田へ走ってきたようですが、橋のところで波にのまれて死んだようです。

三十、尾鷲市賀田町 中島 示夫 (当時29才)

当時は朝から寒かった。地震よつてから津波が来るまである程度時間があるのであわてず何をあわてても逃げることである。

昔の人は地震がよつてから津波が来るまでの間、めしを炊いている時間があると聞かされていたが、そんな時間などなかった。

あの時、津波から逃げるのに道を賀田奥の方へ逃げた人は死亡しており途中から高台へ逃げた人は助かっている。

地震から津波までの時間は十分〜二十分ぐらいであったように思う

三一、尾鷲市屋浜 北村 勝三(当時39才)

あしら中学校の寄宿舎が焚物がたらんというので焚物を作るのに下谷へなぜ切りに行っておった。午後一時頃やったんかいな、時計をふてつたたんさ、ホッと時計を見ようとしたらないんさ、時計をふてつたつたげえーと言ったら、拾ったらまわしてくれるんかいと言んで、しまわしてやるつていったんさ、金やんは拾ろつたんかどうか知らんが十分ばかりしたらあつたて言うんさ、まあしまいやのと言うんで、おおしまいやと言つて下へおりて来たんさ、めしを食べるとこを茶か場で言うわい、そこへ来たと思つたら地震がよつてきたんさ、えらいもんな、おるとこないんやもんな、場所の良いところに茶か場があるんやけど石が動いて弁当を肩にかけたなり木にしがみついて、まだかいなまだかいなと思ひよるんさ、なかなか永かつた。

地震がやむまでの間、石が一つ大きなのがまくれて来た。その石は今でもそこにあるがそこへむけてでにを持った人がやってきてびっくりした。その人はわしらのとこへとんできた。他の連中どうなつたかわからんし、帰る準備をしていたら中学生は焚物をとりにきたんさ、学校はどんなになつているかわからんのですぐに帰した。

私はしばらくの間そこにおいて人夫の帰りをまっていた。それから川を渡つて新道まで出たら向井の連中は自転車でビューと走つていったが百米もいかんうちに引き帰してきた、なんどれて言うたら、津波で言うのはあんなんかいな、樋ノ口までいっばいやがい、それからわしも走つた。野田の田まで走つた、そしたら、追うてきた牛がどつきりおるんさ、津波を見たら腰が抜けたというのか走れなんだ。

そんなり自宅まで来たら家内はおらんのさ、自分の家には被害は無かつたけど津波で流されたワラの取り合いが始まつた。これではどうにもならんと言つので警防団が出てワラを全部分けたが、それに警防団が一日がかりでやつた。翌日、高二さんと二人で残りのワラを集めて皆にクジを引かして分けた。

そないにしているうちに国市から流れた死体の検視をせよという連絡があり二人で行つた。住所は新町で国市におつてやられた。造船所で炭を焼いていた人でした。

三二、尾鷲市矢浜下地 岡 善十郎(当時40才)

わしらぶゆさんとあかはまだの立木を国市へ運んでいた。その日はぬくたかつた、おら上衣もぬいで国市へ置いて立木をおろしたら、ななめになつた。それで梃子をこねよと思つて丸太へ乗つて棒をつつこんだらガタンと落ちたんさ、これは地震のゆれやつたんさ、これは危ないと言つので、ぶゆさんはそんなり家へ行くし、おれは地の端を通つて家へ行くと家の棟はガサツと落ちてゐるし、家の中へは入れなんだ。

その時、庄七、忠七、㊦のおやしさんがきて来てくれて、これはあかん入れんのうと言つて、津

波は来るんじゃないかとおんじやんに聞いたたら、津波の来るときは御飯を炊いて食べて逃げられるぐらいの時間はあるつ言うので、そうこうしているうち㊦のおんじやんが相賀哲さんのお父さんか忘れたが津波やでとおめいてきた。それで第一回目の波が来たがあまり大きくなかった。サツサツサツときた。

大和から送ってもらった正月用のもち米一斗と米二升入れてあったブリキ缶を持つとうとしたが、弁当箱は持っているし、検尺のこをもっているやろ、尺がねを手でつかんでいるので持てなかった。あわてこんでおったので、子供らに樋ノ口へ逃げって言ったがわしわ樋ノ口へ行ったら子供らは中学校へ行ったと言うし、何処まで津波は来もんかわからんし、津波のあと家に帰ったら家はガシヤとなっているし、裏はウナギの池で石垣がぐえたんで波で家がやられていた。

為やんは千石船で二百石の板を積んで入ってきておったが、くるつと回されてどうにもならんで、そんなに為やんはそれに乗って港の方へ出て行つた。二回目入って来て松の木へ登って波が引いて下りたら松の木はみなこかった。

津波で家は流されて家の建っていたところは淵になっていた。津波の晩はやいちおじ宅に泊めてもらいその後半年ばかり高二さん宅に泊めてもらった。

家内は多いし、家を建てる大工さんがなかった。個人的に大工さんをお願いしに許可をとりにつたら逆に、その大工さんを取られてしまった。

三三、尾鷲市矢浜 楠 茂 (当時37才)

当日は矢ノ川の山へ行っておって、八ツに茶を炊くのに茶か場へ行ったら六畳と五尺ぐらいの石がぐらぐらと揺れるので、これは地震やが言い、いよう間に川は泥水になってくるし岩はゴロゴロ落ちてくるし、他の者はきやへんしそのうち亀田おじさんは来て、おれは立木の下にかくれておったんじやで言っておった。

今の米商組合のところまで帰ってきたたら、ごみはその下まできておった。自宅へ来たたら皆中学校へ行っておらんし、このようなことに対しての考えはないので山から自宅まで歩いてきたので三分はかかると思うが、中学校まで行ったら二回目の波がきた。

向井の神社のところまで為やんらは流されたので神社の屋根へ降りようとしたが、流れが速いのでどうにもならなんだそうです。

一回目の波は土地の低い所などに水が溜りながらくるので遅いが、二回目はそれがないので波が速くなる。中川はずつと奥までも波が来ていると思うが、矢ノ川は岩神の奥まできているし、樋ノ口の下までもきていた。岡崎の橋の下に大きな石油タンクがあった。二百石ぐらいの舟が二隻上がっていた。ワラの中にススキが沢山入っておった。

当時は地震や津波のことは皆知らなかつたが、地震がよつたとき、千代太おじは津波が来るとお

めいていたそうです。

矢浜の人は中学校、桂山、神社へ逃げた。安政の津波が矢浜でここまで来たと言う石があつて打止めと言う石が置いてある。

三四、尾鷲市矢浜 野田 高二(当時30才)

検目をやつていて製材所の中におつて、あれは一時二十分か三十分頃やつたと思う。八ツ時前で女の人はお茶を沸かしていた⊗工場でも本台、小割とあつてわしらは永谷為やんと二人で責任をもつて女の人は五く六人で小割の方におつた。

地震がよつてきたので、永谷に地震やがいと言うて永谷は前に出てくるし、わしや裏に梅の木があつてそれにしがみついていた。ほじゃけど、これではあかんと言うことで、前に堀があつたのでそれに入り込んだ。ぐるぐる回ってくるし、どうしようもなかった。

今の田中製材のとなりにあいちおじさんとせつおじとおつて、津波はきやへんかいと聞いたら津波はきやへんやろと言うたが、わしやそんなり母親をみに自宅へ行った。

家におつたもんで津波はひよつとしたらくるかわからんで、早よ逃げいというておいて、工場へもどつてきたら又せつおじと会つたもんで、もう一度津波はきやへんかいと聞いたら井戸の水を見よと言うので井戸をのぞいて見た。

そしたら水があつたので、水があるでと言つたらそれやつたら気遣いがないわつて、工場の中に入つたら津波じゃつておめいてきたもんで、そんなり自宅へ帰つて津波が来るでえと言うて家族を連れて中学校へ逃げた。

近くに山城忠兵衛さんの工場があつたが、それがマッチ箱を畳んだようにピシヤとなつて、ザーと流れてつた。私の家は少し高いもんで波は床下まできていた。工場の台車の中敷は五尺ばかりあつたがそれまできていた。

しばらくして見に行つたら青年団の木場へ百五十トンの舟はうちやがつていた。小西製材の二階は一階が流れて二階がそのまま道路に座つていた。

八日になつて新川原町の角の家に琴平丸が座つていて他の消防団ではあかん、矢浜の消防団でなけりやあかんと言うので行つたが、ロープが短かつたのでそれをとりに新川原町の端を渡つて北浦の郡役場へ行つたが、その時飛行機が飛んできたが、それがB29であつた。飛行機雲を見て漁師の人たちは、あれは落ちる、あれは落ちると叫んでいた。

三五、尾鷲市賀田町 榎本 しずか (当時23才)

納屋において地震がきたので五分ぐらいして子供が曾根へ行っておったんで曾根へ走ったんです。すでに小浜橋へ来たら沖はさざなみが立っておつて、曾根に着く途中で波が来て田んぼへかき上がった。目の前で流れていく家が深みへ沈んでいくのが見えた。

日が暮れるまで山において向かいの山を通つて奥へまわつて賀田へ帰ってきました。

地震がよつて津波がくるまでずい分短かつたように思います。

地震がゆつてからすぐ曾根へ向かつて走つたから、その時すでに波が立っていたので賀田の場合、津波が来るのが早かつたように思う。

私とこの妹は農協へ勤めていたが、友人二人は流れて死ぬし、その子は自分の家に老人がいたので大きな地震が来たら津波があるぞと聞いていたのでそやもんでその子は自分の受け持ちの書類を持って逃げ、友達にも津波が来るさいかに逃げよらいと言うのにその人たちは信用せんとおつて二人とも流されて死ぬし、うちの妹は逃げて助かつた。

同じところおつても、老人がおつて聞いておつた子は助かるし。